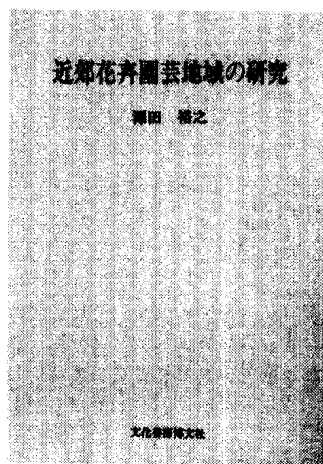


澤田裕之著

『近郊花卉園芸地域の研究』

一九九六年発行 文化書房博文社
A5判 一八一頁 三六〇五円



近頃、花屋さんの店が多くなった。駅前とか、商店街のなかとか、なかにはスーパーマーケットの一角でかなりのスペースをさいている店もある。切り花に加えて鉢物が多くなったため、広い売場面積が必要になってきているからである。売られている花も、かれんな山野草から豪華な洋ランまで、種類は豊富になり、また、昔からなじみの多い花も品種改良が進んで、多くの花をつけたり、いろいろな色を楽しませてくれるようになってきている。その背景には、

家で花を育て、鑑賞することができるようになった経済的ゆとりや、都市に住む人々の自然への飢えといったものがあるであろう。

一方で、花の種を蒔き、水を、肥料を与え、品種改良に情熱をそそぎ、大切に育てている人々がいる。そんな花の産地はどこにあり、どのような産業としてなりたっているのだろうか。それを明らかにしてくれるのが、本書である。

著者のことばを借りれば、生活水準の向上や、生活様式の欧風化などを背景に花の需要が高まり、いまや日本は世界最大の花卉生産国になったという。花の産地は、大きく遠郊（輸送）花卉園芸産地と近郊花卉園芸産地にわけられるが、本書は東京近郊圏を中心に、従来あまり研究が行われてこなかった近郊花卉園芸産地に焦点をあて、さらに遠郊・近郊という区分におさまらない、新しい性格の産地の出現をも考慮しながら、産地の成立や変貌、発展の基盤などを考察したものである。現地調査をふまえて詳細に論じられた、近郊花卉園芸研究の良著である。

以下、順をおって内容を紹介しよう。まず、序論では近郊花卉園芸に関する従来の研究をまとめ、著者の研究課題と目的を述べている。そこでは花卉園芸地域の研究を通じ

ての、体系化が必要であることを強調している。そして、そのためには概念の明確化が必要であり、生産される場所の位置的特性だけでなく、都市農業などの機能的・形態的側面への接近も必要であると説いている。第二章で東京近郊圏と近郊花卉園芸地域を設定し、東京近郊花卉園芸地域の地位と花卉園芸の分布を明らかにして、第三章ではそれらの成立と地域的展開へと進められてゆく。ここでは江戸期の花卉園芸にはじまり、明治期以後の近代的花卉園芸の導入と発展、第二次大戦後の花卉園芸と産地の動向が、具体的に論じられている。読みすすんでいくうちに、著者の長年にわたる現地調査から得られた豊富で貴重なデータと、それに基づききめこまかな分析と解釈が、読む者を花の香りのなかに誘い込む。

第四章では、近郊花卉園芸地域がどのように形成され、どう発展してきたか、そしてその発展の背景や基盤はなにであったのかが明らかにされる。市場に近接しながらも都市の拡大のなかで生産者は移動を余儀なくされ、あるいは商品価値を失った作物にかわるものとして、花卉栽培に転換したりすることによって産地が偏移したり、そうしたなかで栽培技術が磨かれ、それらが後継者に受け継がれたこ

とや、流通の変化とそれへの対応などが、具体的に述べられている。第五章は生産者の経営に考察の中心がおかれ、多品目少量生産への移行や、販売形態の多様化を通じて、経営形態の分析におよんでいる。

第六章は結論で、以上の研究成果をまとめ、次いで総括している。江戸時代にはじまったとされる花卉園芸は、明治以降の変化のあと、一九六〇年前後からの高度経済成長期の爆発的な都市化によって大きく変容した。それらは生産地の移動・多様化となってあらわれ、また、栽培品種、切り花から鉢物への移行、生産者とその経営形態など、さまざまなところに変化をもたらした、という。

ある土地がもつ貌（かお）はさまざまである。また、一つの土地であってもそこは時代とともに常に変化している。本書は花卉園芸という専門の研究成果だけでなく、地域の変化をもみごとに描き出している好著として、一読されることを願うものである。

（大塚 昌利）